「蛇の道」

蜷川　崇

西崎と釘宮のつき合いは学生のころにはじまって十年来のものになるが、はじめから親しかったわけではなく、友人を介してたまに口をきくほどでしかなかった。だが、仲間内に所帯を持つ者が現れ、仕事を理由に疎遠になる者、転職に失敗して顔向けのできなくなる者、命を絶つ者と、様々な事情が重なり、ついに二人だけが残されてしまう。以前より親しくなったものの、彼等はあくまで飲み友達でしかなかった。

ある日、釘宮から「たしか山小屋を持っていたよな」と切り出される。たしかに西崎は、高知県の四万十ちかくに、祖父から相続した山林を持っていた。はじめ西崎はそんなところに行くつもりはなかったが、釘宮の境遇を思うと簡単には断れなかった。二年ほどまえに商社を退職してから、北欧料理の店を経営していた釘宮は、つい先日、ウイルス騒ぎによる経営悪化と、自身の罹患による周囲の心無い言動によって店を畳んだばかりで、失意の中にあったからだ。だが本音をいえば、釘宮の廃業は彼自身の不注意によるものに思え、また西崎自身はこのウイルス騒ぎにさほど不自由を感じていなかった。

空港からレンタカーを借りて深い山合の悪路を進み、やがてたどり着いた山小屋は、二〇年前に訪れた時のまま変わらずそこにあった。童心がよみがえる西崎をよそに、釘宮はあたりに生息する蛙の声と、醜い人間達の喧騒が重なって我慢ならず、一匹を殺してしまう。

夜になって眠ろうとしていたとき、裸になった釘宮が寝袋に入ってくる。体を求められた西崎は、知られざる友人の一面に驚くが、はじめて経験する同性との行為に得体のしれない魅力を感じ、二人は一夜をともにした。朝になって我に返った西崎は、味噌汁をつくる釘宮と昨夜のことを語り合い、つい「あれはただの遊びだった」と告げる。その言葉に衝撃を受けた釘宮は、店を廃業に追い込んだ人々のことが脳裏に浮かんで心を乱し、西崎をおいて山小屋を去る。車も食料もないまま一人取り残された西崎は、それから数日を山小屋ですごさねばならなくなった。

いくら待っても釘宮はもどって来ず、耐えがたい空腹に襲われるようになった西崎は、山を越えて人里に出ようと決めた。コンパスを持って山に入ると、ほどなく拓けた場所に出る。岩に腰を下ろしていると、ひらりと落ちてきた木の葉に視線を奪われる。白樺の枝だと思っていた木肌の先端に目玉がついていた。それは体長五メートルほどもあろうかというクリーム色の蛇だった。動物園でもお目にかかれない大物を前に西崎はたじろぎながらも、藪のなかに去ろうとする蛇を追いかけることにした。捕まえて売れば大金になると思ったからだ。

蛇は出鱈目に進むのではなく、草や根のすき間を選んで這っていく。「これが、蛇の道か」と苦笑していた西崎は、迂闊にも蔦に足をとられて転んでしまった。しばらく進んでからコンパスを失くしていることに気づき、振り返るも来た道は分からず、西崎は遭難してしまう。蛇を取り逃がしたうえに、転倒した際の膝が痛み出し、やがて陽は暮れた。完全な闇が支配するなか、昆虫の群れが地上に這い出し、西崎に迫る。木の上で朝をむかえると、うごめく地面を見下ろしていた前夜のことが幻だったかのように、森はひっそりとしていた。ひどい喉の渇きに、西崎はかつてこの山を訓練に使用していたという陸軍兵士の姿を見る。蔦から摂取した水分に中毒を起こし、嘔吐をくり返

していると、ふたたび蛇が現れた。
鎌首をもたげて襲ってくる蛇から逃げていると崖から転落し、身動きできなくなる西崎。目のまえには川の源泉となる湧き水があった。蛇はそのほとりに近づき、そっと水面に口をつけて水を飲む。一対の夫婦が契りを交わす三三九度の盃のような、あまりに美しい所作に目を奪われていると、西崎には恥がこみ上げてくる。山のなかで完全に自立する蛇。その一方、無様に地面を這いつくばる不自由な人体。蛇に睨まれた西崎は命をあきらめ、蛇との同化を覚悟しながら、最後に釘宮のことを思う。その時、駆けつけた釘宮によって一命を取りとめた。西崎がさまよっていたのは、山小屋からほんのわずかしか離れていない森のなかだった。
入院しているあいだに、「いずれもう一度、山小屋に行ってみようか」と二人は約束を交わし、それぞれの生活にもどっていく。帰路についた西崎は、飛行機から見下ろす山々のどこかで、今もなお被食と捕食のやりとりが営まれていることに思いを馳せ、釘宮との約束はきっと果たされることはないと思いはじめる。「つぎは一人でここにもどってくる」西崎はそういう気がしてならなかった。